

滋賀県子ども若者審議会 第24回会議 議事録

- 1 日 時 令和8年8月31日(月) 15時30分～17時40分
- 2 場 所 滋賀県庁北新館5階 5-B会議室
- 3 出席委員 麻生知宏委員、石井秀樹委員、磯部美也子委員、大澤崇委員、尾上康太郎委員、鎌田恵委員、北嶋あゆみ委員、熊谷理美委員、河野永遠委員、斉藤真緒委員、炭谷将史委員、田口真太郎委員、谷口彰委員、谷村太委員、田中洋一委員、中井洋子委員、廣瀬香織委員、正木博之委員（五十音順）

4 議事内容

○ 開会

○ 出席委員数確認

出席委員数は18名であり、滋賀県子ども若者審議会規則第4条第3項に定める開催要件を満たしていることが事務局から報告された。

○ 子ども若者部長あいさつ

(1) 会長、会長職務代理者の選任について

① 事務局から子ども若者審議会の役割等について説明

② 委員の自己紹介

③ 会長の選出、会長職務代理者の指名について

会長について、審議会規則第2条第2項に基づき、委員の互選で炭谷将史委員が選出された。会長職務代理者については、同条第4項に基づき、会長から磯部美也子委員が指名された。

(2) 新「すまいる・あくしょん」について

(3) 令和7年度における県子ども・若者施策の取組状況について

(4) 子ども・子育て施策推進交付金の取組状況について

(5) 子ども・子育て支援事業計画の代用計画の策定について

事務局から、

○新「すまいる・あくしょん」の概要

○令和7年度における県子ども・若者施策の取組状況（淡海子ども・若者プランの取組結果、子ども若者基金の活用状況）

○子ども・子育て施策推進交付金の取組状況

○子ども・子育て支援事業計画の代用計画の策定について、まとめて説明。

【委員】

・資料の9ページ目、新「すまいる・あくしょん」について、4番『滋賀の子どもの声調査』を踏まえた7つの『あくしょん』で、令和7年度の滋賀の子どもの声調査結果概要の3行目に「幸せ度が0-3点の子どもの30.3%が『誰にも相談しない』と回答」と記載されているが、これは「誰にも相談しない」なのか、「誰にも相談できない」なのか。

その違いが大変大事だと思う。本人の意思で「相談しない」のか、相談できる人がいないなど「相談できない」環境に置かれているのか、選択肢を含めて教えてほしい。

【事務局】

・相談先については、家庭、学校、地域などの相談先を選択肢として設け、あわせて「誰にも相談しない」という選択肢を設けているが、アンケートでは、その背景までは把握できていない。「しない」のか「できない」のかというところは確かに大事なポイントかと思う。ご意見として参考にさせていただく。

(6) 子どもの意見を聴き、尊重する社会づくりについて

事務局から、「子どもの意見を聴き、尊重する社会づくり」について説明。

【会長】

・県では条例に基づき子どもの意見を聴く取組を進めているが、そのあり方や現状の課題、具体的な取組などについて、委員それぞれの活動や経験も踏まえ、さまざまな視点から意見をいただきたい。

・「尊重する」ためには、意見を「聴く」だけでなく、さまざまな取組が必要だと思う。
・意見に対してフィードバックしているとの説明があったが、具体的にどのように行っているのか。

【事務局】

・令和7年度の子どもの意見聴取については、ホームページにて、寄せられた意見を紹介している。また、「にじはびスイッチ」では、オンラインプラットフォーム上で、どのような意見が出たか、それをどのように取組に反映したかを公表し、単に意見を聴くだけとならないようにしている。

【会長】

・ホームページでは、寄せられた意見だけでなく、それに対する県の対応も掲載してい

るのか。

【事務局】

- ・寄せられた意見とあわせて、県としてどのように受け止め、取組に反映したかも掲載している。
- ・すべての意見を反映できるわけではないため、反映できない場合はその理由も説明することが大切だと考えており、その点に留意してフィードバックしている。

【会長】

- ・意見を反映できない場合も含め、子どもと意見交換を行うことが重要であり、そうした対応が行われていることを確認できた。

【委員】

- ・子どもの意見を聴く際、自分に自信がある子どもや自己肯定感、学力が高い子どもの方が意見を出しやすく、そうした子どもの意見が集まりやすいのではないかと。一方で、意見を出しにくい子どもの声も重要であり、そのような子どもから意見を集めるためにどのような工夫をしているのか。

【事務局】

- ・「にじはぴスイッチ」では、自分の言葉で意見を投稿するだけでなく、他の子どもの意見に「いいね」を付けることで、言葉にすることが難しい場合でも意思を表明できる仕組みとしている。
- ・また、システムへの登録を待つだけでなく、意見を出しにくい子どもが集まる場に県から出向いて意見を聴く取組も進めたい。特定の子どもの意見だけにならないよう工夫していきたい。

【委員】

- ・子どもたちの意見聴取については、私が関わる「子ども・若者支援地域協議会」の方でも数年前から「当事者部会」を設置して、専門機関や支援者だけではなく当事者の方々の声を取りまとめて報告をいただき、その声にどう応答するかというところまで取り組んでいるが、「意見を形成し、表明すること」は高度な営みであり、難しさがあると思っている。
- ・また、つながりや場所があり、「声を出していいんだ」と思えることが大切であることから、居場所は大変重要だと思う。
- ・県外の大学に自宅から通う人もいるが、若者は滋賀から出てなかなか戻ってこないこともある。一方、子育てのときに、「滋賀に戻ってきて子育てしよう」と思えるように、

自分の地元で「ここに行けば自分の知っている人がいる」「自分がここで暮らした」というような場所があればよいと思っている。また、滋賀にユースセンターがもっと増えるとよいと思っている。令和9年度から、子ども・子育て施策推進交付金の対象に若者も含めるとのことで、子どもの頃から若者期まで切れ目なく利用できるような居場所があると、若者たちが、外に出てもまた戻って来られるような滋賀をつくれるのかなと思っている。

・そういうつながりの中で何かそうした動きが生まれてくると思うので、もしよければどんなユースセンターを作られているのか、どのような工夫をされているのかを是非共有していただきたい。

【委員】

・子どもや若者の意見がどのように形成されるのかという点は難しいと思っている。

・子どもや若者に「意見を聞かせてください」という形で関わっているが、意見を聞く前から関係性を構築し、「意見を言ってもよい」と思える場を醸成しておくことは重要である。一方、例えば「公開討論会で市長に対する質問をみんなで考えよう」となったときはまず意見は出ない。「居場所をつくり、関係性ができているから何か意見が出るか」と思っても出ない。意見を形成する前に、学んだり、きちんと情報を収集したりする段階が必要だと思う。そこにコーディネートの難しさがある。知識の詰め込みと子どもたちの主体性を損なわせないということを、どう両立させていくのかということは、本当に難しい。

・「居場所が大切」と言いつつも、解像度の高い意見を言える子ども・若者を育てるためには、多くのコーディネーターが必要だと感じる。

【委員】

・当団体にも大学生が多く、団体としては「子どもから若者になる」ところにフォーカスして活動しており、ユースセンターづくりにおいても、中学生、高校生までは、意見を聞いてもらえる雰囲気が全国的にあるが、高校生から大学生になると、急に自立を求められ、なかなか意見を聞いてもらえないこともある。本人たちはまだ自分の中で整理がついていないにもかかわらず、若者になると、その意見がなかなか聴かれない状況にあると当事者から聞いた。

・「こども県議会」などは、興味関心があり、親御さんがすすめるなどして参加する子どもが多いと思う。一方、私たちの団体には、「友達に連れられてきた」「あまり興味はないけれど何となく来た」という子どももいる。そうした子どもたちも、関わりの中でさまざまな課題に気づいたり、「もっとこうしたらいいんじゃないか」と考えたりして、自身でもアクションを起こしていくことが多い。センターではそれを狙っており、「高い意識を持っている」層だけではなく、「普通」の高校生、大学生が関われるようにな

ることを目指している。

・コーディネーター、つまりは近しい大人との親近感のある関係性は大事になると思うので、そうした関係性を大事にするセンターにしたいと考えている。そこからさまざまな関係機関、地域、学校、行政などにつないだり、私たちがコーディネーターとして継続的に関わったりすることを目指している。

学生たちからも「やっと場所ができる」と期待する様子が見られる。

【会長】

・居場所の中で、意見を持ち、表現できるようにしていくことも必要だと思う。「意見を聴く」というのは受け身で、「子どもはすでに意見を持っている」という前提で進めがちだが、その前段階で考えたり、話したりできる環境をつくっていくことも必要ということだと思う。

・意見を聴くプロセスを丁寧に細かく見ないといけないかもしれないと、お二人の委員から指摘いただいたと思う。

【委員】

・子育ての観点から言うと、子どもが自分の意見を言えるように育てることが大切だと思う。

・0歳から2歳の赤ちゃんを連れているお母さんの様子をよく見ているが、例えば、未就園児を対象とした収穫体験などのイベントで感じるのは、コミュニケーションが苦手だったり、自分自身の意見をうまく表現できなかったりする母親もいる。

・感想を話すのも少し苦手で「何がいいって言ったらいいのかな」と、顔を伺っている方が多く、子どもたちを見ている、「お母さんにどう言ったらいいか」と顔をうかがっているように見える。

・体験一つとっても、「青色を選びたい、赤色を選びたい」と子どもたちは自由に選べるはずだが、「どっちを選んだ方がいい」と親の顔をうかがっているような空気があり、母親が「青の方がいつも好きなんだから」と選択を促すような場面もある。

私たちはいつも「自分が何を好きか」とか、「自分がこれを選んで楽しいと思うこと」を子育ての中でも尊重してあげてほしいと思うし、そういう意味でも、コミュニケーションが大事だと思う。

【会長】

・保護者講演会をするが、「正解を教えてほしい」「どうやったらいいかを教えてくれ」という感じがある。親御さんも困っているところはあると思う。

【委員】

・子どもたちの意見を聴いていくという今回の話を伺い、私は、0歳から就学前までの年齢の小さな子どもたちは、自分の思いを言葉で伝えることが難しいため、どのように意見を聴けばよいのかと感じていた。

・今日話を聞いて、意見を言える子どもたちを育てていけたらと思う。まずは、0歳であれば、お腹が減ったら泣く、オムツが濡れたら泣く。そして、それをしっかりと受け止めてもらうことで、安心して自分を出せる、そうした環境を乳児の頃から積み重ねていくことで、2歳ぐらいになって反抗期を迎えたときにも、「どうしたんや」となるが、そうした思いも十分に出来る関係性の中で育つことを大切にしている。

・当園では「5歳児（就学前）になったら、自分たちで遊びを考えていく」プロジェクトをしている。先生が遊びの計画をすべて提案するのではなく、自分たちで何をやりたいかを決め、それをするためには、何をしたらいいのか、どういうものを準備したらいいのか、ルールづくりも子どもたち自身で行う。

また、大変ではあるが、多数決をあえて行わない。意見が違ったら「何でこれが嫌なんかな、どうしてこれをやりたいかな」を話し合わせる。友達の異なる意見をしっかりと聴くことも大事であり、そうした経験をたくさんさせたいと思っている。

・保育士たちは、答えをすぐに言わず、自分たちが答えを見つけていける支援をしていくことを大事にしている。政治や社会について話すことはまだ難しいが、「自分たちの遊びをよりよく楽しむためにどうしていくか」の経験を、まずは幼児期に育んでいきたいなと仲間と話をしているところ。

【委員】

・普段、小学校で子どもたちに関わる立場から、「こども真ん中社会」をつくっていく上で、子どもが意見を言うことは以前から大切にしているが、学校教育の中でも、その実現に向けた取組は進んできていると感じている。

・例えば草津市では、小・中学校で「総合的な学習の時間」などを活用し、地域を題材とした課題解決学習を進める中において、どの子にも自己決定する場があることを大切にしている。子どもたちが地域の中から課題を見つけ、地域の方と関わりながら、その解決に向けて自分たちで行動する取組を進めている。

・これまでは、地域の方に協力していただき、子どもから「ありがとう」と伝える場面が多かったが、現在はさらに、子どもたち自身の活動が地域にプラスの影響を与え、逆に地域の方から「ありがとう」と言ってもらえるような学びも大切にしている。

・一方で、こうした取組がすべての子どもに届いているか、どこかで取りこぼされている子どもがいなかったかという視点も必要である。見栄えや出来栄だけでなく、一人ひとりにどのような学びがあり、自己実現につながったのかを見ていくことが重要だと思う。

・また、日常の学級生活では、「できたこと」「素晴らしいこと」は共有しやすいが、「弱み」「苦手」「少し言いづらいこと」を出すことは難しい。そうしたことも安心して出す

ことができ、周囲に受け止めてもらえる関係を育てていくことで、「自分にもよいところがある」「周りには仲間がいる」と感じられるようになる。

・そうした経験を積み重ねることが、子どもが自分の意見を発信できるようになることにつながると考えており、そのような視点を大切にしながら日々関わっている。

【委員】

・行政職の立場なので、学校現場の取組を十分に把握しているわけではないが、教育委員会でも子どもの声を聴く機会はいろいろとある。

・例えば、中学校区に学習塾が少ないことから、「定期考査の前に中学生が集まって勉強できる場所がほしい」という声が学校で上がった際、先生や教育委員会が先回りして場所を用意するのではなく、まずは生徒会の生徒自身が教育委員会に「部屋を貸してほしい」と申し出たり、電話をかけたりするなど、自ら動くことを大切にした。その結果、中学校の帰りに役場の会議室で勉強してから帰ることができるようになった。

・また、現在、小学校の大規模改修を進めている中で、学校の先生にも協力いただき、子どもの意見を聴く機会を設けた。その中で、「女子には体育館の更衣室があるが、男子は教室で着替えており、男子にも更衣室がほしい」という意見が出され、検討委員会でも子どもの意見として受け止め、男女それぞれの更衣室を設ける方向で話が進んでいる。

・こうした事例で大切なのは、子ども自身が主体となって行動することと、大人が先回りしすぎないことである。例えば通学路の危険箇所について、保護者や地域の大人から改善要望をいただくこともあるが、実際に通学路を通っているのは子どもたちである。

・子ども自身が「どこが危険なのか」「どのようなところに困っているのか」を発信することが大切であり、必ずしも「こうしてほしい」という具体的な解決策まで示す必要はないと思う。

・また、意見を出しづらい子どもの声をどのように把握するかということと、幼児期から自分の意見を持ち、それを表明できるよう育んでいくことが大切だと思う。

【委員】

・普段幼児から小学生と一緒に探訪などしている中で言うと、意見を聞いたときに大人が求める答えを言える年齢は、思っているより低いと思う。幼い頃から、大人が「楽しかった？」と聞くと「楽しかった」と答えるし、「美味しかった？」と聞いたら「美味しかった」と答えることが、結構あると思う。「小さい子だから本心を言っているだろう」と思いがちだが、意外と大人の顔色を見ている。また、大人の忙しきや余裕のなさもよく見ているので、保育者が何かに集中していると、子どもに何かがあっても「今は言わんとこ」となる。とても大事なことでも「言わんとこ」と思ったりする。大人側に余裕をつくることも考慮した方がよいと、3歳から12歳を見ていて思う。

・また、私の小学校3年生の娘は学校にほとんど行かず、自由な森の幼稚園みたいところで育ったが、その中で、自分の意見を言うことに慣れすぎて、普通校に入った結果、自分の意見を言える場面が少なく、馴染めなかったということがあった。「何かそのまま突っ走らせてあげられたらよかったな」と思っている。

・あと、子どもたちの相談相手がAIになってきているとも感じている。私の娘が学校に行かない理由を周囲から何度も聞かれた際、いろいろな理由を話していたが、それらは本当の理由ではなかった。最終的にはAIに本当の理由を書いており、落ち着いたときに「昨日ここに書いたんやけど、これ見てくれる？」と見せてくれたことがあった。セキュリティ上の課題もあると思うが、本人が落ち着いて話せる相手が、人ではなくAIのような存在である場合もあるから、うまく活用していけるとよいと思う。

【委員】

・私が関わった事例で、5年ほど前に学童を開設する際の話である。私は、学童は地域が困っているため必要な施設だと思っていたが、住民説明会で「騒がしくなるのが嫌だ」という反対意見が出たことがあった。最終的には理解を得ることができたが、子どもの居場所を地域の中でつくっていくことの難しさを感じた。

・一方で、学童のような子どもの居場所では、オリンピックに話をしてもらうなど、民間だからこそできるイベント性のある取組を行い、子どもたちに楽しい経験をしてもらいたいと考えている。

・最近、各地で子ども会がなくなっていることを知り、子どもが地域の中で楽しい経験をする機会が減っているのではないかと感じている。子どもの頃に滋賀で楽しい経験や思い出を多く持つことは、一度県外に出たとしても、将来また滋賀に戻りたいと思う気持ちにつながるのではないか。

・今は、子ども会や地域行事が減り、運動会などのあり方も変わっている。そうした中で、地域での楽しい経験が少なくなっていることが、将来のUターンにも影響するのではないかと感じている。

・また、例えば自転車通学の許可を受けても、実際には家族に送迎してもらう子どもが多いことや、忘れ物があれば家族が学校まで届けるといったことも増えていると聞く。子ども自身が失敗したり、自分で対応したりする経験が少なくなっているのではないか。

・子どもを大切にすることはもちろん重要である一方で、子ども自身が自立していくための経験をどのように確保していくのかという視点も必要だと思う。

【会長】

・「こども真ん中社会」という言葉が広がる中で、子どもを大切にすることの意味について、捉え違いが生じている場面もあるのではないかと感じる。

【委員】

・児童養護施設には、虐待等を理由に入所する子どもが多い。入所後、「ここがいい。ご飯が1日3回食べられるから」と話した子どもがおり、それまで十分に食事ができていなかったことがうかがわれた。

・その子どもは、それまで家の手伝いなどでスポーツができなかったが、入所後にフットサルを始めた。施設的环境上、十分な練習ができなかったため、どうしたらよいか話をしていたところ、ネットで寄付を募る話となった。

実際に寄付を募ったところ、寄付をいただくことができ、必要な環境が整い、本人の夢がかなえられた。

・自分が希望したことが実現する経験を重ねることで、本人も次の希望や意見を話すようになった。1年間で大きく変化し、さまざまなことを言えるようになったと感じている。

【委員】

・子ども自身も、そして子育て中の保護者の方も、それぞれ「悩みや困っていること」がある。こうした意見聴取の中で、子どもの本来的な困りごとや悩みが本当に出てくるのかということも気になる。

子どもの声調査を令和7年度にされているが、ここでは、数値的なことよりも、小さな子どものつぶやきを大事にしてほしい。

「生活の中でこんなことに困っている」「嫌なことがある」、そういうことを特に大切にしていきたいと思う。というのも、子どもの命を私たちは大切にしなければいけない。子どもの権利を、大人としてどのように大切にしていけることができるのか。ここに「おとなあくしょん」という言葉が出ているが、大人として「子どもの生きる権利を大事にする方法」というのはどのようなアクションがあるのか、そのあたりも明確にしていきたいと思う。

・それからもう一つ、国の方で3歳児以上に関する話が出ていたが、今後このことについても、県として取組を進めていただく予定か。

【事務局】

・今おっしゃっていたのは「満3歳以上限定小規模保育事業」の話かと思うが、こちらは国の方で従前は特区で実施されていたものが、全国展開されたところである。

基本的に、小規模保育事業の実施主体は市町村であるため、県が直接実施するものではないが、市町のご意見等を伺いながら、県として支援できることがあれば、支援していきたいと考えている。

【委員】

・少年センターにいる立場から申し上げると、日頃私どもが関わっている子どもたちは、自分の意見を言うことがなかなか難しい状況にある。

市では「子ども議会」も行っているが、そこで意見を言える子どもだけではなく、私どもが日頃関わっている、なかなか意見を言いづらい子どもの意見も何とか入れられたらという思いがある。

・また、資料P 8の「子どもたちの現状や課題の把握」では、アンケート調査をされているが、全国的に言えば、全国学力・学習状況調査などでかなり子どもの現状というのが把握できており、大変大きなデータになっていると思うので、そうしたデータも、子どもの現状把握に生かしていただきたい。

また、インターネットや SNS の利用状況はかなり深刻なものがあるし、そうした背景を十分に踏まえた上で、子どもの意見を聴いていく必要がある。「自分たちでそのことについてどう考えていくのか」というところまで掘り下げていかないと、上辺だけの「正しい意見」を聴くことになってしまう。情報を理解した上で、自分で考えるところまで掘り下げる必要があると思う。

・子どもを取り巻く状況は、みんなが感じているよりもう少し深刻であると感じる。

【委員】

・私たちは日々母親の方々と関わっており、その中には悩みを抱えておられる方も多い。

やはり、意見や悩みなどは、なかなか自分の思いを表に出すのが難しいところがあると思う。何度もお会いし、信頼関係ができてこそ、初めていろいろ自分の思っていることや抱えている悩みを、やっと話してくださるようになる。資料には「居場所づくり」が多く盛り込まれているが、そうした居場所がたくさんあり、信頼関係を築ける人と接する中で、「よりよいものができていけばよいな」と思いながら聞いていた。

【委員】

・今回の議論のテーマである「子どもの意見を聴き、尊重する社会づくり」を考える際の、「子ども」という対象が非常に幅広いため、現在の滋賀県で、誰にどのような状態になってほしいのかを想定した上で取組を描く必要があると思う。

・緊急度の高い子どもへの支援というアプローチももちろん重要である一方、普通に生活しているものの、意見を言うことができればもっと伸びるかもしれない子どもも多くいると、普段子どもたちと接する中で感じている。

・そうした子どもたちにとっては、親や教師だけでなく、少し年上の身近な大人など、安心して対話できる相手がいることが、意見を表明することにつながるのではないかと。

・私自身は、意見を尊重するということは、「聴くこと」と「応答すること」がセットであると考えている。県でも、メールや SNS、オンライン、AIなどを活用し、子どもの意見を聴く手段は非常に増えている。一方で、それに対してどのように応答してい

くかということも重要になる。

- ・その上で、今後必要になるのは、対面で子どもと対話できる人をどれだけ増やせるかということだと思う。ユースセンターのような場所で、親や教師とは異なる、少し年上の身近な大人と話すことができる環境は、現在まだ十分ではないと感じている。

- ・子どもの意見を聴くことを、親や教師、教育委員会だけに任せることには限界がある。例えば、小学生との意見交換の場で、「暑すぎるので通学路の途中に日よけがほしい」「途中で水を飲めるようにしてほしい」といった意見が出た場合、こうした声を地域の方が知ること、地域の中にある場所や資源を活用し、対応できることもあるのではないかと。行政だけでなく、民間や地域の人たち同士がつながり、子どもとの対話の機会を広くつくっていく仕組みを進めてほしい。

【委員】

- ・若者の立場から議論を聞き、県や県内の団体でさまざまな取組が行われていることを知った。

- ・子どもや若者が安心して過ごし、意見を出せる「居場所」を今後さらに増やしていくことが重要だと感じた。

【委員】

- ・先ほど、大人が子どもの意見を十分に聴いていないことがあるという話があったが、私も、大人が子どもの話を聴くことは非常に大切だと思っている。

- ・児童養護施設の子どもたちに対して、「何か困ったことはないか」「楽しく暮らしているか」といった聞き取りを、県の子ども家庭支援課が主体となってここ20年以上続けられていて、それに関係している。

- ・当初は、施設の職員にも「何をしに来ているのだろう」という雰囲気があり、子どもたちにも「言っても何も変わらないだろう」という雰囲気があった。しかし、子どもたちが言ったことに対応し、施設の職員の方がその結果を子どもたちに返していくことを続けることで、少しずつ「言ったら何かが変わる」と実感してもらえるようになり、以前と比べてよく話してくれるようになったと感じている。

- ・そのような経験からも、子どもの話を聴いてくれる大人がいるということは大切だと思う。

- ・私は心理職として仕事をしているが、例えば子どもが大人に何かを話した際、大人が十分に受け止めず、一言で終わらせてしまうことがある。そうすると、子どもは「次から言っても仕方がない」と思ってしまう。

- ・一方で、「そうだったんだね」「そのときどう思ったの」といった形で、子どもの気持ちを受け止めながら話を聴くことで、「自分の嫌だった気持ちを分かってもらえた」と感じ、また話してみようと思えるようになる。

・そうした大人側のちょっとした配慮が、子どもの権利を日常生活の中に根づかせていく上で非常に重要だと思う。

・子どもに「あなたにはこういう権利がある」と知識として教えるというよりも、日々の生活の中で、自分の意見を聴いてもらったり、自分の思いが尊重されたりする経験を積み重ねることが大切である。そのような体験を通じて、子どもが自分の権利が守られていると実感できるようにするために、どのように関わればよいのかを考えていくことが大人側の課題だと思っている。

(7) その他

事務局から事務連絡。

○ 子ども若者部次長あいさつ

○ 閉会